

ペンリウク バフンケ 二十六時のペウタンケ

土橋 芳美

なぜだ

なぜ そなたが

ここにおる

カラフトアイヌで

その名を知らぬ者がいないとまで

言われた

バフンケよ

嗚呼

嗚呼

聞くまでもないことよ

ここが

「アイヌ納骨堂」などと

まやかしの看板のある

北海道大学医学部の

「標本保存庫」

だとすれば

このわしが

死後

三十年が過ぎた

一九三三年に

墓を

掘り返され

「学者ども」によって

無残に

運ばれたように

そなたも

同じめにあつたと

推察される

あの樺太の

地から

どうやって 運んだのか

想像するに

胸が痛む

きりきりと

きりきりと

嗚呼

これが

人間のなせる

わざなのか

わしを知っておるか

ヒダカの国

ピラトリの

ペンリウクだ

わしがまだ若かったころ

樺太に行き

そなたの父

ハセランケと

会ったことがある

そなたは凜々しい

若者で

ハセランケの自慢の種だった

「見よ

わしの息子 バフンケを

彼は剛気で

俊敏だ

時代が どれほど

変わるうが

こやつが

わが民族を

守るだろう」

そう言って

眼を細め

白い髭をゆすって

笑っておった

アイヌの男への

最高の褒め言葉に

こんながある

なに

これは樺太も北海道アイヌも

同じだ

シレトク (器量がいい)

ラメトク (度胸がある)

パウエトク (雄弁である)

この三つを兼ね備えた者が

コタンの長となると

決まっておった

そなたは

この三つの全てで

抜きん出ておった

アイヌは小柄な者が多いなかで

そなたは

今でいうなら

二メートルに

近い大男であった

そして容貌が

端正で

しっかりとした太い眉と

深い知恵を持つ者の

静かな眼差

筋の通った高い鼻

女にも男にも

これほどの美貌は

ないであろうと

まさに

シレトクよ

そして

狩りにも優れ

帆かけ舟で

海をわが庭のように

駆ける

まさに

ラメトク

樺太でも

一、二を争う

雄弁家

ハセランケの血を

ひくだけあって

その声の高さ太さが

際立っておる

理路整然たる

弁舌は

他を圧倒する

まさに

パウエトゥ

そなたの父ハセランケは

神からの

預かりものでもあるかのように

「見よ、わしの息子の立派さを」

と、来る者に

誇らかに語っていた

ペンリウクよ

わたしの若い日のことを

覚えていてくれて

ありがたい

なぜだと

そなたも言ったが

なぜわれらが

こんな所に

囚われねばならぬのか

ポクナモシリ「死者の国」

にいるはずの

われらが

いったい

どんな罪があつて

こんな

辱しめをうけるのか

墓を掘り返され

その骨を

こんな場所に

置かれねばならぬのか

誰だ

いったい

誰が

こんなことをしたのだ

人間の

にんげんの

皮を被った化物よ

正々堂々と

このバフンケの前に現れよ

三日三晩でも

千日でも

万日でも

不眠不休で

チャランケ「談判」

しようぞ

アイヌには

人間として犯してはならぬ

絶対の決めごとがある

その第一番目は

死者の霊を

冒瀆してはならぬということ

厳しい自然のなかを

生き抜き

われらに命を

つないでくれたからこそ

今がある

その者たちを

敬い

感謝し

慰霊することは

人間として

第一の

礼儀と教えられた

朝に

夕に

感謝を伝え

時季にかなって

コタンをあげた

シンヌラツパ「先祖供養」を
行ったきた

その墓を

暴くとは

なんとという大罪か

「九四三番 頭骨

個人特定可能

一九三六年八月

樺太島にて発掘

発掘発見主体 北海道大学

医学部解剖学第二講座

相浜 I

として管理」

【北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書より】

なんという

読むに耐えない

文献か

一九二〇年に

六四歳で生を閉じた

わたしは

丁寧

コタンの者らによって

埋葬された

そのために

用意されていた

最上の

着物と多くの

副葬品だ

父が

死者の国、ポクナモシッへ

出向くとき

恥ずかしくない

身支度をするのだと

口うるさく言っていた

わたしは妻に最上の

着物を作らせていた

そうして

わたしは

先にいつている

先祖たちと

再会するのを

楽しみにしていた

「解剖学研究資料収集のための発掘」

だと

いったい

誰の

許しを得て

このことが

成されたのか

死して

まだ

十六年しかたっていない

わたしの墓を暴き

一九七センチの

大柄な遺体を

掘り出して

「これは 立派な資料だ」と

ほくそ笑む

学者どもの

ふやけた

醜い顔が

眼に浮かぶ

カムイよ

このことの

罪の深さを

アイヌへの

にんげんへの

冒瀆を許すなかれ

アイヌモシリ

ホツカイドウと呼ばれようが

カラフトと呼ばれようと

われらは

その昔から

この地に暮らし

アイヌの

にんげんの

住む大地として

この地を崇めてきた

死者を弔い

生きて在るものは

人間ばかりでなく

鳥も

熊も

魚も

虫も

植物も

共に在ることを

喜びとして

生きてきた

こんな

こんなむごい扱いを受ける

いわれはない

バフンケよ

その怒り

もつともなりと

わしも思う

墓を暴き

遺体を掘り返し

持ち去るなど

これは

れっきとした

犯罪であろうよ

そこに

どんな言い訳が

たつのか

「学問の」

「人類の起源の」

だと

小賢しい

しかし不思議に思うこともある

事件を起こした

罪人は

証拠品を隠すことに

必死だと聞くが

この者らは

その

証拠品を

陳列して

誇っておる

ペンリウクよ

わたしは

死んで

たった十六年で

墓を掘り返された

一九三六年のことだ

その遺骨には

まだ肉片が

付いていただろうよ

それを

どうしたのか

大鍋に入れて

煮はがしたか

おぞましいか

おぞましいかぎりよ

にんげんの

にんげんのなせることか

アイヌの

血と

肉片の混ざった

その鍋の汚水は

どこに流されたのか

排水管を通って

この大学の周辺に

撒かれたか

そのとき

「学問」も

「研究」も

汚辱の沼に

墮ちたのだ

北海道大学は

アイヌ人骨の多さを

誇っているようなところがある

しかしいずれ

わかるであろう

数の多さが

恥の多さに

罪の深さに変わるときがくる

各地のアイヌたちが

返せと

裁判をおこしている

なぜ

返さないのか

理解に苦しむ

返すことで

己が恥を天下にさらすことになることを

人並みに恥じているのか

しやらくさい

最早

隠しようもない

事実として

世間に知れわたっておる

バフンケよ

わしが地上での最後の年

一九〇三年（明治三六年）の九月に

そなたと

関わりのある

男がわしを

訪ねて来たぞ

バツツワフ・シエロシエフスキ

というアイヌ研究者の

通訳を兼ねて

プロニワフ・ピウスツキ

という者だ

後にその男は

そなたの姪

チュサンマと

夫婦になったそうだな

実直ないい男だったと記憶しておる

彼もまた

アイヌ研究者の一人に数えられるが

人間としての

理性と

品性を

失わぬ

超えてはならない

非礼をしなかった

バフンケよ

そなたの遺骨返還の申請を

してくれる者がおるようだな

わしの骨も

子孫の者が

北大と掛け合い一度は

「返します」

と言いながら

「再調査したら別人の可能性がありません」

と返還を拒んできた

調査したという

骨が

ほんとうにわしの骨だったのかどうか

疑わしい

子孫の同意なく

やれ「調査」だ「研究」だといって

いまだに

「研究材料あつかいだ」

わしの時のように

そなたの遺骨も

なにやら理由をつけて

返さないのではと案じておる

北海道大学は

返還申請に来た者に

やれ戸籍謄本だ

子孫だという

証拠はなにかと

高飛車だ

ならば問う

わしらの墓を

掘り返したとき

誰の許可をとって

どんな証明書をもって

したのかと

わしらは

ボクナモシリ「死者の国」

にいるべき者

元に

在るべきところに

われらの遺骨を

返すべし

嗚呼

嗚呼

バフンケよ

ペウタンケの「危急を知らせる叫び声」

叫びを

あげよう

(上)ペンリウク、Adolf Fischer 画 一八九七、国際日本文化研究セ

ンター蔵 (下)バフンケ、太秦供康画 一九〇五、北海道博物館蔵

